

第11図 下城跡実測要図

#### 4 新城 所在地 三拾町 字新城

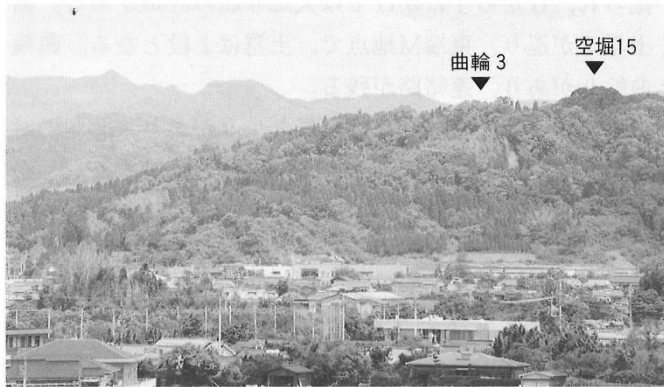


写真5 新城跡遠景 (南側面)



(西側面)

新城は大字三拾町の北西に延びた山中にあり、山裾には蒲生・加治木を結ぶ県道川内・加治木線と山田・北山へ通じる県道下手・山田・帖佐線が走る。東方約1kmには平山城がある。

以下第12図により地形及び小字について説明をする。新城の主郭は、小字新城に含まれ、城域は正福・屋敷ヶ迫に広がり、北西に小字陣ノ尾があるが遺構は不明であった。南山麓には、平山氏建立の若宮神社がある。小字卯月の丘陵先端には墓地があり、搦手口へ至る山道がある。

大手口は小字木島(図中矢印)と考えられ、台地上には複数の平坦地が確認されるが、曲輪とは断定できなかったため、作図は行わなかった。しかしながら、馬洗い場といわれる箇所もあり、広義には城域に含まれると推測され、小字屋敷ヶ迫の平坦地及び小字卯月の頂上部とともに将来の調査に待ちたい。

この新城は、戦国時代の大永6(1526)年、帖佐地頭筑前守忠直が築き、その後島津昌久・伊地知重辰が在城したといわれる<sup>①</sup>。また、弘治3(1557)年まで続く戦国島津氏と蒲生・祁答院両氏との争いの主戦場であった。以下、山頂部の遺構について、第13図により説明する。

新城は東西に長く、北東部は背後の山と尾根続きとなっているが、搦手で空堀15により切断されている。新城の中核部分は山頂の曲輪1・曲輪2・曲輪3と考えられる。

城の南西にある大手口を進むと、右手に曲輪13・14への入り口がある。そのまま直進すると、P～Q～Rを経て、搦手口へ至る。ここでは、最短距離で主郭へ至る道筋を説明する。

曲輪12の北側には、曲輪10があり、敵の大手からの侵入と城の北側への回り込みが監視できる。曲輪11には、一段高いA区域があり、緩斜面Bとの間にある現道(矢印)ではなく、Aの南側を通過していた可能性も残る。ここを過ぎると、空堀2に遮られたCに至る。Cから北には、曲輪7と曲輪1の切岸に挟まれた空堀1がある。空堀1の西側には曲輪7があり、北側に土塁4があり、その東端は幅2mほど開いている。その足元は10m以上の絶壁となっている。

空堀1を真っ直ぐ登り切ると、絶壁となり空堀8へ転落する。西には高さ約2mの曲輪6があり、対面の曲輪1とともに侵入した敵を挟撃できる。曲輪1の北には、土塁をもつ曲輪4と空堀9・10のある曲輪5がある。この曲輪5北側には、尾根を断ち切った空堀11を挟んで、曲輪16が延びる。

曲輪1の南には、土塁2と土塁1があり、土塁1はGとともに虎口を形成する。曲輪1と曲輪2の間には、空堀3と空堀4が深く掘り込まれ、各曲輪を独立させているが、わずかに幅

1 mもない土橋によって連絡している。曲輪2は北側に土塁5・6を設けている。  
 曲輪2と曲輪3の間には、空堀5が掘られ、HからJにかけては犬走り状の区域がある。曲輪3の西から北にかけては切れ目なく土塁7が巡り、東端M地点で、土塁は2段となる。曲輪3の南には、一段低い位置に曲輪8と曲輪9があり、連絡路が残る。

空堀3及び空堀5を北へ下ると空堀12と接続する。空堀12には土塁8・9があり、北側に対する防御であろうか。空堀12を東に進むと、階段状の急勾配となり、空堀15と接続する。しかしながら、逆に登ってくることは困難である。

搦手口は、空堀15を登り切ると、土塁9の北側へ達し、そのまま西へ進むとRへ至る。この間、平行して走る空堀12・土塁8・土塁9に拠る城兵からは常に攻撃にさらされると予想される。

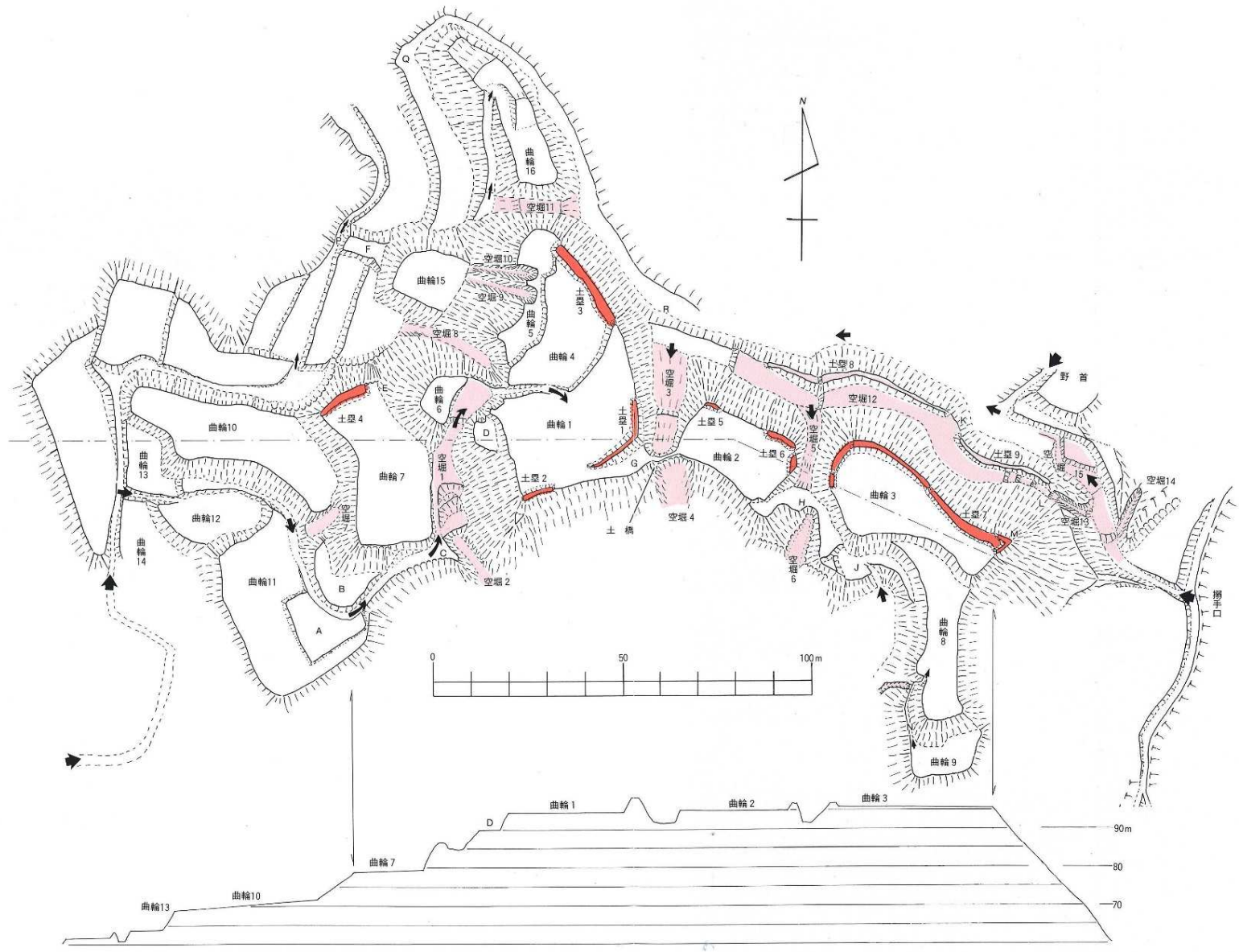
また、推測であるが、曲輪15の西側に突き出たFは、人為的なものであり、敵の移動を困難にする遺構ではないだろうか。

なお、新城は実測調査後、平成5年8月の豪雨により、空堀1を始め随所で崩壊し、残念ながら、第13図の原形を止めていないことを報告しておきたい。

註①「三国名勝図絵」卷三十八 帖佐 平山城



第12図 新城跡周辺地形図及び小字図



第13図 新城跡実測要図 (折込み)

## 5 諏訪城 所在地 平松字城ヶ宇都

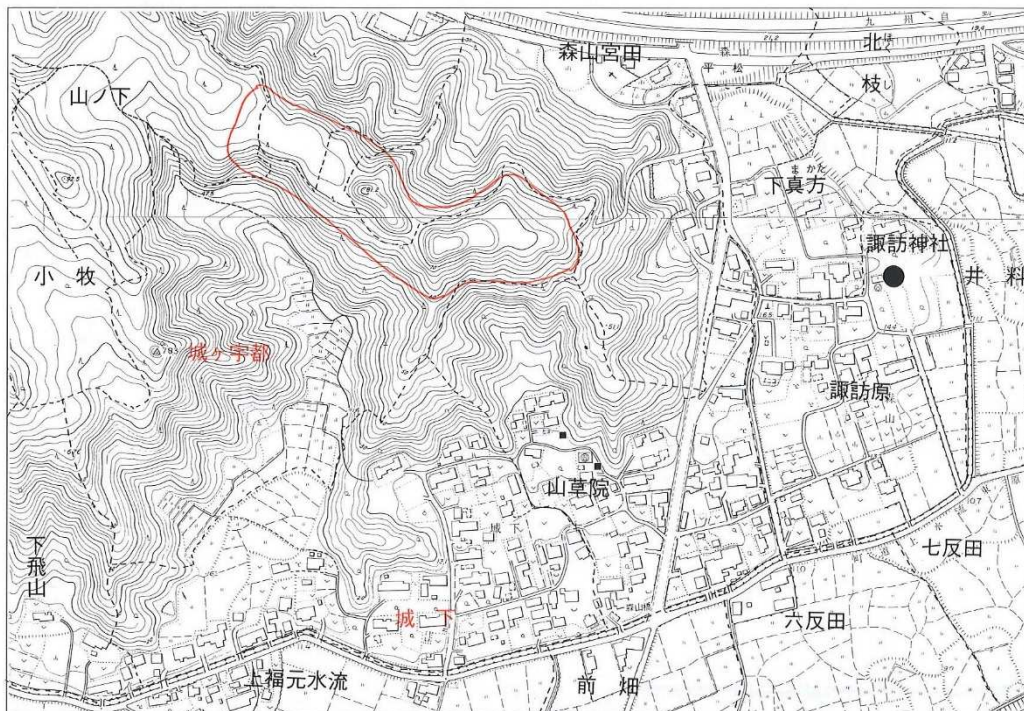


写真6 諏訪城跡遠景（南から望む）



諏訪神社

諏訪城は、城下集落の北側にある小さな山頂にある。第14図中の城跡周辺の小字名について以下説明する。城域は城ヶ宇都・森山宮田・真方に含まれ、城域の主体部は城ヶ宇都にある。城の南には城下、南東には山草院、東には諏訪原の各小字が位置する。城下自治公民館敷地には、古い五輪塔が移設されており、北側の山中にも数基残されている（第14図中の■印）。小字山草院に関係する遺物であろうか。平田信芳氏の地名研究によれば、諏訪原は14,5世紀頃に書かれたと思われる「大隅蒲生内平松水田坪付帳」に地名としてみえる<sup>①</sup>。この諏訪原の北端には稲荷神社が一角を占めており、明治以後に諏訪神社を合祀している。諏訪神社の創建は、以前あった棟札によれば、「諏方大明神 邑主館より丑の方、二十町餘、(略) 弘治二(1555)年 丙辰六月二十九日、地頭三原遠江守重秋造立、諏方社一字云々」と伝えられている<sup>②</sup>。



第14図 諏訪城跡周辺地形図及び小字図

平成元年6月28日から7月20日にかけて、町都市計画課の依頼により町総合運動公園取付け、道路工事に伴う遺跡の詳細分布調査を実施した。以下はその調査結果に基づくものである。

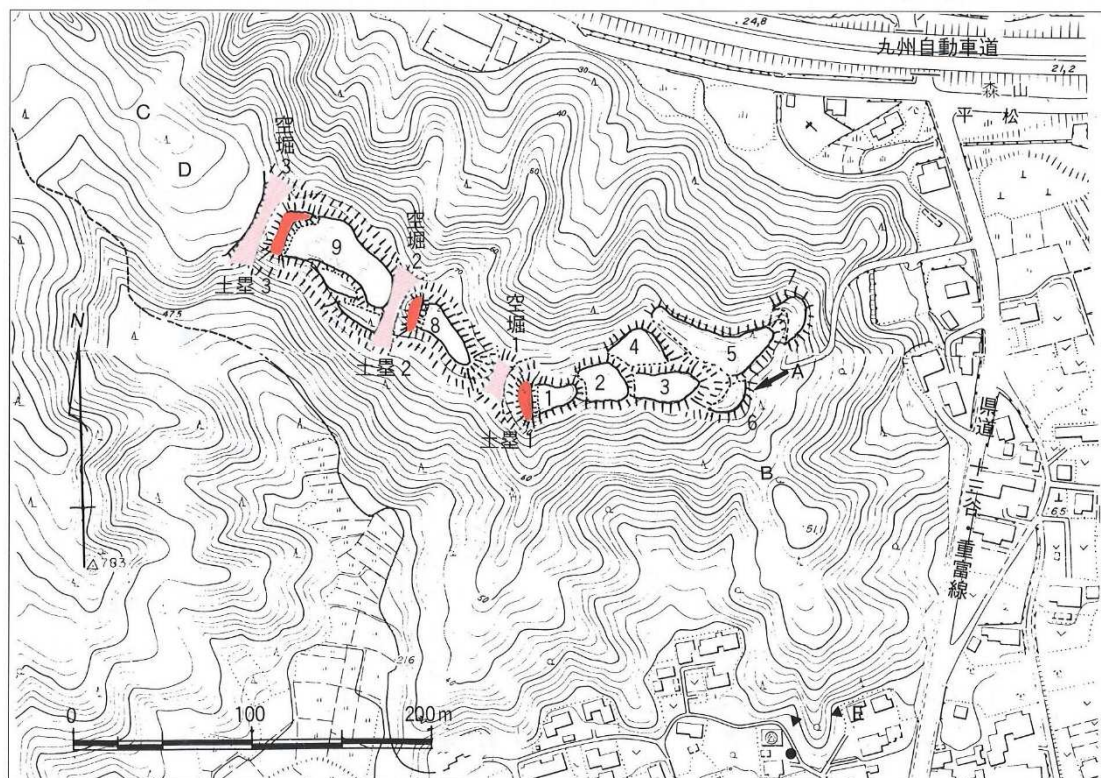
第15図は略測による諏訪城跡見取り図である。大手口は確認できなかったが、Aから曲輪6へ進むと推測される。曲輪7は現在ヘリポートとして使用され、掘削されている。曲輪5・4・3・2・1は階段状に配置されている。曲輪1の西側には土塁1があり、空堀1とは高さ8mほどの高低差がある。西側半分の曲輪8・9は同じ構造であり、西側に土塁と空堀を備える。曲輪9は面積が一番広く、南に二段の小さな曲輪をもつ。尾根を断ち切る空堀3は最も大きい。曲輪6の南側B地点では、空堀は確認できなかった。また、北西のC・Dには遺構はなかった。

諏訪城についての記述は、『三国名勝図絵』に「諏方ヶ城 邑主館より子丑の方、十七町餘、平松村にあり、山城にて東西長し、南北は水田に臨む、東は村里、西は原野につづき、堀切三ヶ所あり、」とある<sup>②</sup>。当時現地踏査を試みたものか、簡潔ながら正確な記述であることが、平成元年の調査で判明した。また、諏訪城は空堀1を境に東西に区別され、築城の時期差が想定される。つまり、最初に曲輪1～7から構成される東部の城が作られ、時期において西部の曲輪8・9が新しく造成されたと推測される。曲輪8・9は西側からの攻撃に対していると考えられる。

なお、城下集落の山麓（標高21m）には、蒲生町鶴ノ木・桑の丸から引いた用水路「上溝」が東へ通っている。この「上溝」は建昌城山麓を抜け高樋に至る。当城の城主とともに、戦国期におけるこの地方の支配関係に興味を持たれる。

註①平田信芳 1980 「第1章遺跡の環境」 『萩原遺跡(Ⅱ)』

②青潮社刊 1982 「卷三十九 重富」 『三国名勝図絵』



第15図 諏訪城跡見取り図

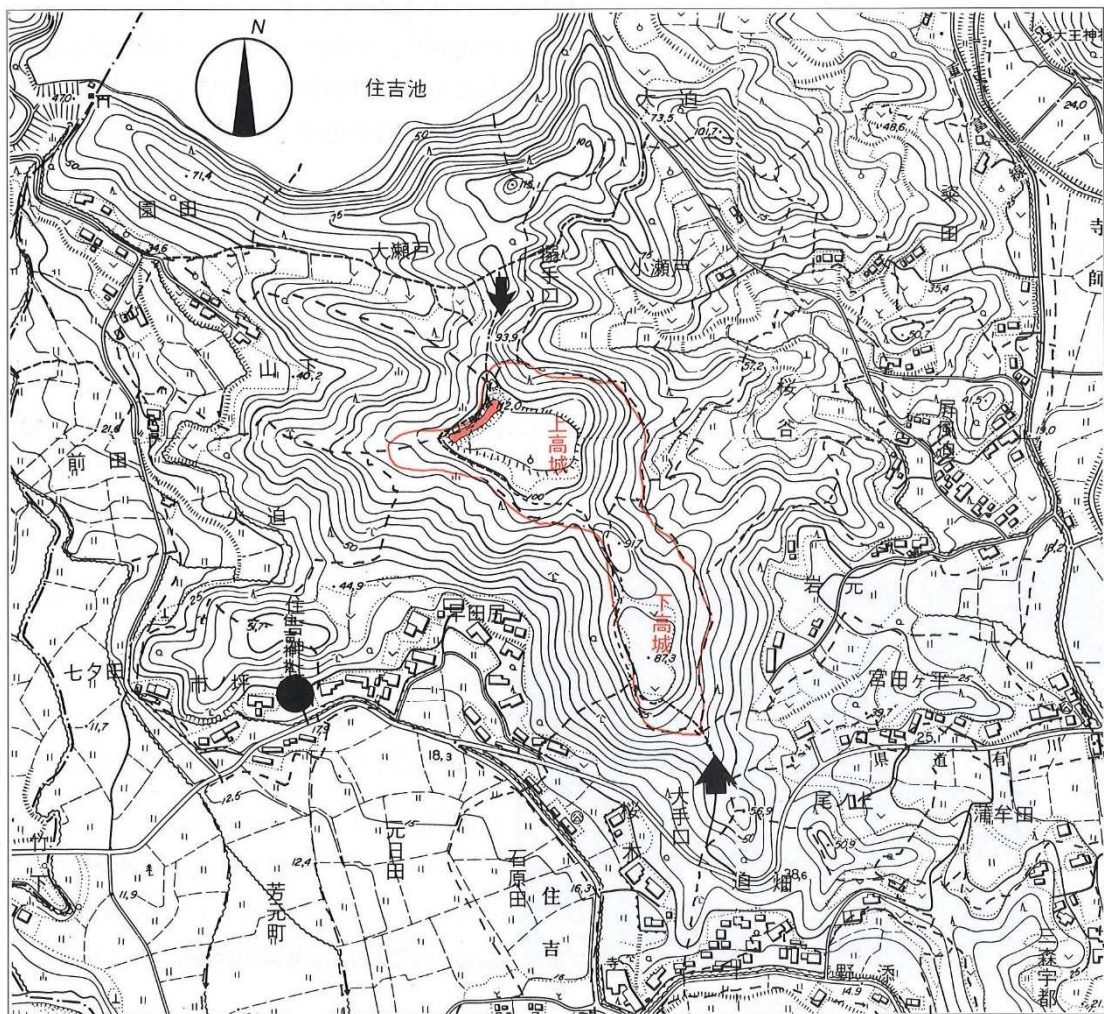
## 6 高城 所在地 住吉 字上高城・下高城



写真7 高城跡遠景（東から望む）

高城は大字住吉にあり、標高110mの略南北に延びる山頂に築かれている。南側には、住吉・永瀬の水田地帯が広がり、その中央部を別府川の支流蒲生川が南東へ流れる。城の東側山麓は寺師に属する。また、城の北側には住吉池があり、切り立った火口壁が池の周囲を巡る<sup>①</sup>。第16図の搦手部がわずかにくびれている。城の西側は住吉池から取水した用水路を境に蒲生町と接する。第

16図のとおり現存する城域は、ほぼ小字上高城・下高城に相当する。城の南西山麓には、鈴木三郎政氏が勧請したと伝えられる住吉神社がある<sup>②</sup>。



第16図 高城跡周辺地形図及び小字図

高城への登り口は、県道有川蒲生線が大きく南へ迂回した箇所にあるが、平成6年度には第16図大手口矢印地点を通過する改良工事が予定されている。工事に先立ち平成5年度に現地調査を実施したが、工事予定箇所には明確な遺構は確認されなかった。

高城の城域は、第17図中の尾根道E地点を境にはっきりと上下地区に分けられ、便宜上、小字名に従って、「上高城」と「下高城」区域に分けて以下説明する。

「上高城」における平板実測については、雑木等に遮られて測量は困難であったため、略測にとどめ、第16図中に土塁の位置のみを記した。この土塁は曲輪の西側にあり、高さ約1.6m、長さ約60mであった。また、曲輪は南及び東方向になだらかな勾配をもち、外郭線は明瞭ではない。土塁の北端には、北側からの尾根を断ち切る空堀が1か所ある。

搦手口（第16図中矢印）より北側には、空堀などの遺構は確認されず、寺師（小字小瀬戸）から西（小字大瀬戸）へ通じる山道が今も利用されている。

「下高城」については、第17図により説明する。県道有川蒲生線から北側の尾根上（第16図参照）に山道があり、この道を約200m登り切ると第17図中の南端に達し、この道が大手口と考えられる。平坦地Fの下を通り、曲輪5・曲輪2の西側を過ぎて、帯曲輪状のCへ至る。C地点と空堀1との落差は約4mあり、急斜面となっている。侵入路はそのまま曲輪1・曲輪3の西側を北上し、曲輪6へ至るのが順当と思われる。D地点は一段下がっている。

曲輪6の北側には、2段構造の土塁1があり、その北側には空堀2を挟んで土塁2がある。土塁1・2ともに盛土ではなく、自然地形を削り残したものと思われる。土塁1から曲輪7にかけての北側斜面は急崖となっている。これらの遺構は、西側を走る「上高城」からの連絡路を監視するものであろう。

曲輪6の東側には、曲輪7・曲輪8が階段状に配置してある。曲輪8のさらに東側にある尾根上には2本の空堀が切っており、敵の侵入を困難にしている。

曲輪6の南西側には、曲輪4へ至る通路がある。曲輪4は南北に長く、東端には方形の一段高い区域があり、見張り台などの遺構を想像させる。

曲輪4の南から空堀1へ進むものと思われる。空堀1を登り切ると、南に曲輪2、北に曲輪1がある。曲輪1には約1mほど高い逆L字形のA区域があり、ここが「下高城」における最高所である。A区域は土塁ととらえるには面積が広すぎるため、曲輪1の一部とした。

曲輪1・空堀1・曲輪2が構成する区域は、周囲より一段高く、城域全体における最も重要な区域と予想される。



写真8 住吉神社

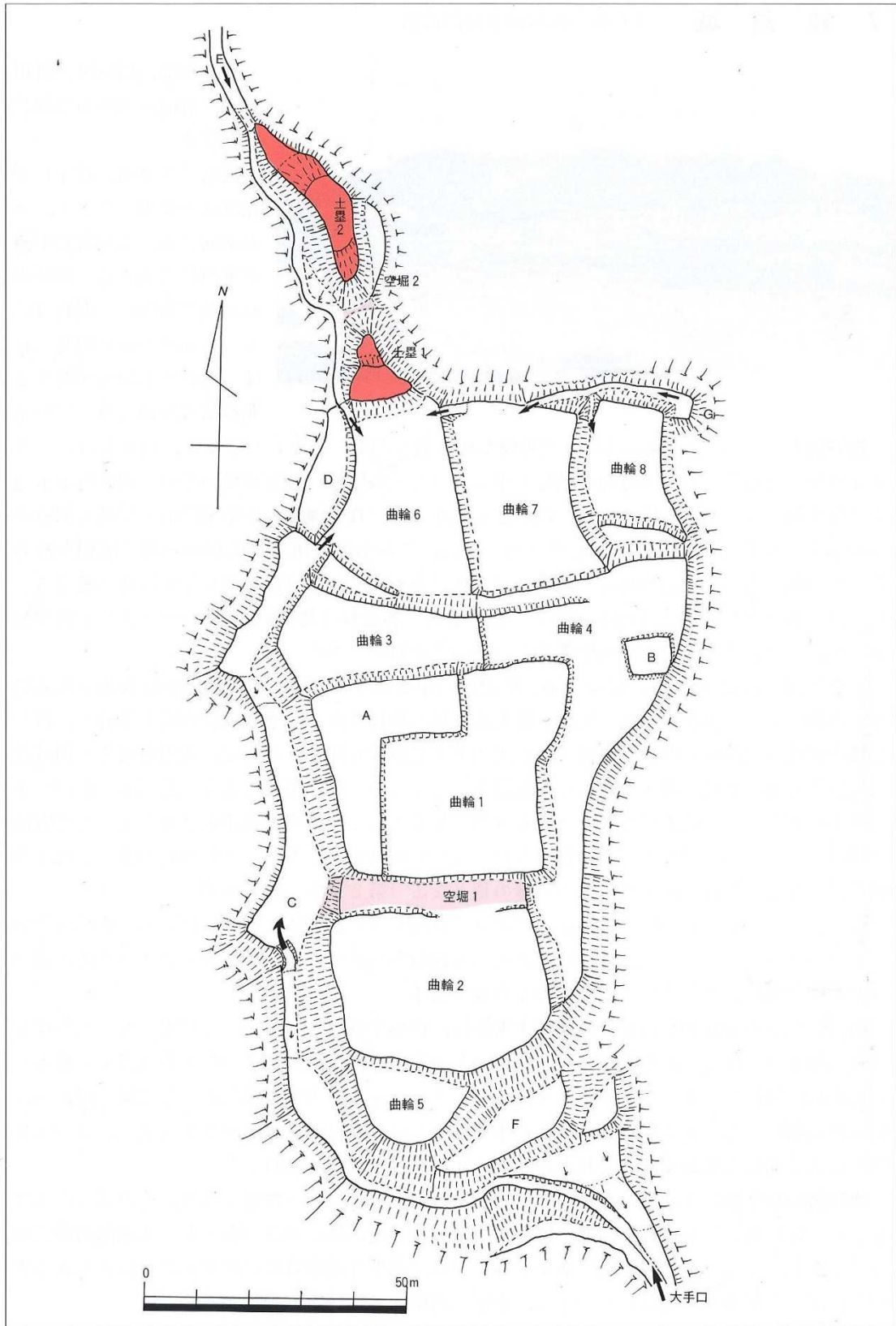
最後に、「上高城」と「下高城」を比較した場合、これまで説明したように、土塁や曲輪の配置からみて、「下高城」の方が防備が堅固であり、城域全体から見て、城域の中心部は「下高城」区域と考えられる。

註①成尾英仁 「建昌城の地質」

『始良町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）建昌城跡』

②「帖佐」『三国名勝図絵』卷三十八





第17図 高城跡実測要図（「下高城」区域）

## 7 建昌城 所在地 西餅田字建昌城他



写真9 建昌城跡遠景

建昌城は、始良町西餅田2126、2163～2209番地他に所在する。

別府川と思川に挟まれた丘陵部の南東に位置し、その南面には、九州自動車道が東西に貫通する。城跡の北側及び西側は、開析谷によって周囲の山と隔てられ、唯一後背の丘陵と接続する北西部は隘路となっている

(第18図参照)。この北西部には、大規模な切り通しがあったといわれるが、現在では、シラス採取及び県道十三谷・重富線の拡幅工事によってその原形はとどめていない。現在町上水道第2配水地となっている場所には、以前小丘陵があり、森山池から小字境に沿って続く旧道がこの小山の西を巡って県道へ達していた。また、この小山の南には山頂から続く尾根を断ち切った空堀があったと言われる。城域は略東西にやや長く、北東部が逆L字状に北へ延びる。城跡は、自然地形に沿って西方へ次第に高くなる。各曲輪は標高約90m～110mまでの間に配置され、縦横に空堀が走る。東山麓からの比高差は約80mある。

享徳年間(1452～1454)、島津家第9代忠国の弟豊後守季久は、平山城の平山氏第9代武豊を攻め落とす。その後平山氏一族は、鹿児島武村へ移封される。季久は帖佐郷を領有し、新たに瓜生野城(建昌城の前身)を築き、長男忠廉と共に移り住む。そして、次男忠康を平山城に、三男満久を加治木城へ置き、有力な国人領主としてこの一帯に勢力を張る。文明9(1477)年に季久は死去し、一時雲門寺、その後総禅寺へ改葬される。豊州家島津第2代となった忠廉は、文明18(1486)年に宮崎の飢肥へ移封され、瓜生野城は廃城となる。その後戦国期にかけての帖佐は、島津・祁答院・蒲生各氏の争奪の地となる(第2章6 15頁参照)。

瓜生野城については、その後しばらく文献には現れないが、慶長19(1614)年に建昌城という名で再び現れる。しかし、これ以降歴史の表舞台からは姿を消し、わずかに江戸時代に書かれた帖佐由来記によってその概要を知るのみである。

明治時代から昭和40年前後にかけて本遺跡は、植林や畑の耕作地として利用され、大規模な土地の改変を受けることがなかった。昭和40年前後、始良農協は遺跡の西側約3町歩を購入し、始良町城山育雛センターとして営業を開始し、平成2年3月まで存続した。その後、同敷地は始良町が取得した。町では昭和63年から平成2年にかけて遺構の確認調査を実施し、その成果は「始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)建昌城跡」として刊行した。

第18図の小字図によれば、丘陵頂上部は、旧城山育雛センター敷地を除き、そのほとんどは小字名「建昌城」に含まれ、山城に関する小字名は「建昌城」のみであるが、北東部斜面にかかる小字名「寺前」やその北側にある「寺下」は、瓜生野城築城時に存在したと伝えられる雲門寺に関する地名と考えられる。また、小字「内雨乞」には南方神社がある。

以下第19図について説明をする(図中の各遺構番号は前記「報告書」の番号を採用した)。